はじめに

日本語母語話者は、初対面の相手に対してもほとんど無意識にスピーチレベルを切替えながら、微妙なニュアンスを伝え、また感じとっている。しかし日本語を母語としない学習者にとっては、このスピーチレベルシフトこそが最も習得困難な点になっているとの指摘は多い。特に上級の日本語学習者にとって、日本語のニュアンスを正しく理解して運用することが非常に重要ではないかと思う。しかし、これまでの日本語教育はそれに関する教育内容が足りなくそうである。

大学院は日本語の上級の学習者が集まる代表的な所ではないかと思う。そして大学院の教育の中にきわめて重要な構成部分の１つは各種のセミナールだ。だから、大学院のゼミの談話場面での会話に研究することが必要だと思う。

この論文の目的は、大学院のゼミの談話場面での会話をとりあげ、母語話者の発言に比べ、非母語話者の発言を中心にして分析し、どんな条件の時にどのようなシフトが見られるか、それからそのレベルシフが生起することにより、どのような効果、働きがあるのかを探る。

先行研究

スピーチレベルシフトの研究は言うまでもなく敬語の使い分けにも関わっている。杉山（2005）の研究は同じ大学の同じ学部に属する学生同士の討論におけるスピーチレベルシフトに着目したもので、丁寧語から常体へ、常体から丁寧体への発話へシフトが生じるローカルな条件を６つをあげている。①場面の変化（公的や非公的）、②司会者から学生に立場の変化、③談話管理の必要、④遠近、親疎という心理的な変化、⑤発話を聞かせる相手の変化、⑥談話構造の変化。話し手はスピーチレベルをシフトさせることによって相手にそのような様々なメッセージを送っている。

牧野（1996）は常体と敬体をウチとソトの関係でとらえ、ウチ向きは話し手向き、ソト向きは聞き手向きとしている。丁寧体の使用が圧倒的である座談会の場面をとりあげ、その際の常体への変換の例として、ある事柄が発話者の中で固定化したイメージのようになっているか、長い間考えて確信のようなものになっている場合に変換が見られると述べている。

安井（）の研究は同一談話内での同一話者によるスピーチレベルシフトを第三者の日本語母語話者がどう評価するのかを通じて、文体レベルであり、特にデス・マス体とダ体の差には敏感で、この差が評価に大きな影響を与えることが明らかになった。

岡部（）はコンピューターゲームを用いた課題解決場面を例に、スピーチレベルの変化に注目し、日本人高校生と交換留学生の対人関係の調節方法を分析する。日本人高校生と留学生とのスピーチレベルの使用の主な相違点は「自己標識」の用いられ方にあると述べている。

本研究では以上の先行研究を踏まえて大学院のゼミの談話を対象に　丁寧体から普通体へ、普通体から丁寧体へのシフトの両方向から分析を行う。